

ベック兄メッセージ 於：アイドリッゲン 2007年6月10日

今日、私たちが、また、ここに来られたことを感謝いたします。私個人としては、出発の数日前まで、はたして来てもいいのか分からない状況でしたが、主が働いてくださり、医師の許可が降りました。

毎週 E メールで発信しているニュースを受取っておられる方々は、私たちが今年どのような状況に立たされてきたのか、ご存知かと思います。

次のような詩があります。

「何が起きようとも、わが心よ、静まれ。

神があなたを祝福したいと思っておられる。今日も神の一日である。

新しい朝に夕に、あなたは神のもとで安らぎ、見守られている。」

この詩のような体験をさせていただけるのは、大変な特権です。

私の発病は、突然でした。三年前に煩った白血病が再発し、その他にもいろいろと問題が付け加えられました。すべてがまったく予期せぬ出来事であり、突然起きました。

そのとき、いつものように予定が非常に詰まっていました。連日、一日につき 2、3 カ所で家庭集会があり、その間に交わりもたくさん予定されていました。少なくとも月曜日だけは休みにしようと思っていても、たくさんの葬儀が入りました。私たちが健康である限り、主は私たちがペースを落とすことを望まれないようです。

しかし、私の発病によりストップがかけられました。さあ、どうしたらいいのでしょうか。予定がしっかり立てられていました。数ヵ月前から結婚式を行なう約束をしていましたし、多くのよろこびの集いも計画されていました。

今年に入って3回入院をして、ついに自宅謹慎になり、できるだけ人との接触を避けるようにと言われました。化学療法によって免疫力が大変下がっていたからです。

そこで明らかになったことは、私も時には病気になってもいいということでした。もちろん、幾度となくこの病気の目的について考えを巡らしました。入院した時には、しばしば次のように考えました。「私が入院しているのは病気のためではなく、医師や看護士に主イエス様を証しするためである」と。蒔かれた多くの種が発芽し実を結びますよう、ともにお祈りください。

病気になることは、ひとつの危機にも成り得ますが、いずれにしても休息をもたらし、心の浄化と成熟のための時間であり、心のふるさとへの道しるべを求める時間でもあります。誰でもが切望すべきことであります。

フランス人の数学者であり哲学者でもあるブレーズ・パスカル(1623-1662、享年 39才)は、次のように祈りました。

「主よ、あなたのみこころのままに行なってください。私は、健康も病気も、いのちも死もあなた様に願いません。私の健康と病気、また、いのちと死も、あなた様のご栄光と私の救いのためにご支配くださいますように。私にとって何が益であるか、あなた様だけがご存知です。

あなた様が主でありますから、みこころを行なってください。与えてください。取り去ってください。私はひとつのことだけを知っています。あなた様についていくことが最善であることを。

私にとって、あなた様を侮辱することは損となります。私にとって、健康か病気か、富か貧困か、そのどちらが益となるのかわかりません。この世のこと、すべてについてもわ

かりません。この決定は人間やみつかいの力を超えたものです。私にとって何が益で何が損であるのか、私には隠されています。あなた様の秘密なのです。私はそれを解明しようとは思いません。ただ、祈り求めるだけです。」

ある兄弟集会に於いて祝福された奉仕をされた、フックス・フェルディナンドという兄弟は、次のような詩を書きました。

「山々の神よ、谷々の神よ、深淵の神よ、天の神よ。あなた様のお導きは、決して間違っていない。すべてのことを正しく司られます。

小さき者の神よ、弱き者の神よ、無に等しい者の神よ。あなた様は悩みの中にも歌えるように助けてくださり、私たちが神の子供であることを知らせてくださいます。不安の谷間で失望している者に新しい朝を知らせてくださり、足りないものは何もあります。

力と権威の神よ、私の力が無くなり何もできなくなったとき、あなた様の御手が私を支えてくださいます。永遠の神よ、そのとき、私をあなた様のところに引き上げてくださいます。私は、あなた様を喜びをもって賛美します。私の歩みは祝福されるでしょう。」

私たちの母であるクリスタ・フオン・フィーバーン（アイドリンゲン姉妹会の創設者）は、次のように言われたことがあります。

「地上で私たちの前に置かれている日々を思うとき、慰めと喜びがあります。主の恵みと守りの豊かさを喜び、いつも確信することができます。」

長年、私たちが気にしてきたことは、信仰に導かれた人々の霊的な成長です。私たち無しに成長できるかということです。私たちがいてもいなくてもよい存在であるべきなのです。そして、今回の私の病気を通して、つまりスイッチが切られた状況の中で示されたことは、私たち無しでも大丈夫ということでした。

兄弟姉妹方が以前よりも積極的に関わってくださり、以前よりも多く祈られるようになり、すべては予定通り進められました。よろこびの集いや家庭集会、洗礼式、結婚式、そして葬儀も。私たちは改めてわかりました。兄弟姉妹が互いに必要とし愛し合うところには、未信者の方も求めて来られるということを。主が、頭として、権威として、認められ望まれるところでは、主に属する人々を主が用いられます。

あなたが何をなすべきなのか、どのように、また、いつなすべきなのかを、主に尋ねてください。それは、私、あるいは私たちの奉仕を、主が助けてくださるからということではありません。すべては主のなさることです。私たちが仕えさせていただけるのは、ただ主の恵みによるのです。なぜなら、主は私たち無しでも、お出来になるのですから。

私たちが新しく見せていただいたのは、主イエス様が、私たちと全く異なっておられるという事実です。

弟子たちも、当時そのことを体験させられました。主イエス様を理解できなかったのです。カナの婚礼で、マリアはただ言いました。「ぶどう酒がありません」と。イエス様の答えは、「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。あなたの思いと私の思いとは異なるのです」。

たびたび、弟子たちは次のように認識せざるを得ませんでした。「イエス様の考えは異なっていて、自分たちには理解し分けることができない」と。

私たちが如何に多くの間違いをしているかが分かれば、幸いです。主イエス様は言われます。「あなたと私では考えが異なります。あきらめて、あなたの計画を手放しなさい。あなたから出るものはすべての外的で、わたしがしようとするものの邪魔になります。」主イエス様と私たちの間には、いつも違いがあります。イエス様だけが父なる神のみここ

ろにかなっています。イエス様が私たちの中を御姿で占領されたときに、初めて、まったく私たちと異なるお方、主が私たちを用いることがお出来になります。私が何を考えようとも、それは大切ではありません。私の考えは主の邪魔になります。主イエス様と私には何一つ共通するものはありません。この対立は、どこまでも一致することはありません。主の前に、引けを取らないものは何一つありません。自分の努力はすべての外れです。徹底的に自分に絶望した者だけが、靈的に先に進めるのです。

この世は、うそ、偽り、欺瞞に満ちています。人間のもっとも内的な性質は、偽るものです。しかし、イエス様は真実そのものです。他の人が何を考え、何を言うのか、それは重要ではありません。人間の中に真実はありません。理性や意志、また、感情は真実ではありません。サウロは信者を迫害しながら、神に仕えていると確信していました。私の中におられるキリストは、私自身とまったく違うのです。私が肉のあるいは靈的にどうであれ、それはどうでもいいことであり、内住されるイエス様は、まったく違っておられるのです。

私がどういう者かではなく、主がどういうお方であられるか——私たちの意見は簡単に変わります。しかし、内住されるイエス様はお変わりになりません。主イエス様は、私とまったく違うお方ですから。私はイエス様の中に安らぎ、すべてをイエス様にお任せします。主の中に留まりなさい。主の中には、休息、平安、自由、守りと安全があります。それらをキリストが私たちに与えられました。すべてを私たちは持っているのです。主が、私たちにとって、すべてとなるべきです。信じる者は、自分自身の中には何も求めず、ただ主にすがりつくのみです。

私たちの主は、いつも悲しみ、悩み、苦しみを通してのみ、ご自身を啓示されます。ですから、私たちには悩みが必要であり、主は悩みを送ってくださるのです。使徒たちは、

教義や方法、規則などについて論じ合ったことはありません。主イエス様のことを告げ知らせ、絶望的な状況に置かれたのです。脱出の道を見出せず、主に叫びました。すると、主は改めてご自身を現わされました。脱出のない、どん底を経験すること無しには、新しい啓示は得られません。助けを与えてくれるのは、律法や教義ではなく、イエス様の新しい啓示なのです。主の中にのみ、光といのちがあります。

御霊で満たされていた主は、ご自分の考えを否定されました。「わたしはどうでもよい。父よ、あなた様は何を望まれますか。わたしは何を語り、何をなすべきでしょうか。わたしの思いではなく、わたしの判断ではなく、あなた様の判断、みこころがなりますように。」

イエス様の生涯は、完全に父のご支配の下にありました。イエス様は目立たない存在でいたかったのです。十字架の意味するところは、自分の意見も十字架に付けることです。日々、自分の思いや感情は、十字架の下に持っていかなければなりません。主が、頭として決定権をお持ちです。

次のような疑問が浮上します。

・私たちに対しての「処分権」が主にあるのですか？

・主は、思い通りに私たちを取り扱っていいのですか？

主は、ご自身のご栄光で満たすことのできる器を求めておられます。私たち自身が死ぬ必要があります。死んで「自分で生きる」ことを止め、「主無しで生きる」ことを止めるのです。そうすれば、開かれた天を体験できるでしょう。しかし、その前に、私たちの中には墮落しかないと認めなければなりません。「何と哀れな者、私は失われたもの」とイザヤは証言しました。自分に死ぬことが、私に起こりうる最善のことです。

いかなる苦しみがあろうとも、すべてを御手から受け取るのです。主が、すべての苦し

みや圧迫から私たちを解放されるのは、私たちにとって必ずしも気持ちの良いことではありません。パウロに対してサタンの使いを送り、こぶしで殴らせたのは主でした。それはパウロが高慢にならないためでした。

死ぬことによって、イエス様のいのちが見えてきます。主にとっては、父のみこころだけが決定的でした。サタンから、また肉の兄弟から、そして弟子たちから、提言されたことがあります、一秒たりとも耳をお傾けになりませんでした。父のみこころだけが決め手となりました。

御霊は、私たちからすべての自主性、すべての思いを取り除きたいのです。その上で、すべての責任を負いたいと思っておられます。イエス様はご自分では何も出来ないと言われました。「わたしの語ることばも自分から語っているのではない。私のしていることも、わたしでなく、わたしの中におられる父がそうされているのです」と。

私たちは、主を愛しているとしても、自分自身の道をも愛してはいないでしょうか。自分の道が妨げられることを嫌います。ですから、主が違う道に導かれると失望するのではないのでしょうか。私たちは何かを手にしたい、どこかに辿り着きたいと思う者です。しかし、私たちとまったく異なった方であられる主に似た者とならねばなりません。

主イエス様がすべてにおいて第一となられるべきです。主に依存することが許されており、それによって主の満たしにあずかることができるのです。満たしは主の中にしかありません。内住するイエス様は、とにかく、私たちとは違います。ですから、私たちは自分自身を否定することによってのみ、満たしを体験できるのです。

私たちは、自分の人生はすべてうまく行っていると、自負している可能性があります。しかし、突然行き詰まり、間違った道を走ってきたと認めざるを得なくなることがあります。

す。それは、主を見上げ、主の導きを祈り求めることを第一としてこなかったからです。

ダビデには、良いと思われる考えがありました。「主は、契約の箱をエルサレムに取り戻したいと思われている。さあ、行こう。」神様が何を目的にされているのか、主に尋ねることもせず、運ぶ車を造りました。〔契約の箱が落ちそうになったのを押さえた〕ウザは死に、契約の箱はエルサレムではなく、オベデ・エドムの家にまず運ばれることになりました。〔第1歴代誌 15 : 12、13〕→13 : 3～14？

私たちにも良いと思われる考えがあるかもしれません。しかし、それが主のみこころであるか、私たちの思いであるかを、主に尋ねなければなりません。主とともに歩んでいるかどうかが大切なのです。神の霊が働いている中には、あふれるいのちがあり、主がどこにおられ、どのように働こうとされているのか、また、私たちに何を要求しておられるのかがわかります。何が起きようとも、主の元にいつも身を避け、血潮の覆いに身をおくことが許されています。

主は、私たちが自分をゼロの状態に置いたときに、ご自身を啓示されます。5千人の人のためにパンを買うことは不可能でした。ある人は38年間病気で、助かる望みは皆無、すべては絶望でした。生まれつきの盲人は、見たことが一度もありませんでした。ラザロは4日間も墓に入っていました。このように、人間的な助けが不可能になったときにだけ、主は介入されたのです。

イエス様は、ご自分の栄光のために役立つならば、介入して下さいます。私のすることには何も価値はありません。主のご目的は私たちの中に、また、私たちを通して、主がご栄光を受けられることです。私たちに何が起きようとも、どうでもいいのです。自分の力に拠り頼むのではなく、主のみこころを尋ね求めるならば、主は必ず働いてくださいます。